





外觀写真



バルコニーから眺める



バルコニー



リビングルーム



階段室を昇り上がる



階段室

るか、これが最大の課題である。

たしかに、インド社会の現実にほとんど無知なるこのほくにも、召使いを何人もただ同然で雇える社会差別や経済格差の難題の存在は、あきらかに透けて見える。だが、それはそれとして、この「塔の家」には、ムガールの近世、コルビュジエの近代、インド第三世代の現代的批判精神がミックスされ、ほどよい加減で「成熟」しているのである。

それはつまりこういうことだ。ムガールの近世において、ここでは住まい方のスタンダードがすでに完成し、「成熟」の域に達している。惜り物ではなく、自己の内部に生まれ、成長した居住様式である。そして、その居住に対する成熟した欲求を、空間として組み立てる手法、それがここで言うコルビュジエの近代である。さらにそれを自らの歴史に接続させるインド第三世代の独立的気概の、三つが合体しているのである。

街はずれからこの建物を見た時、反対に「塔の家」の屋上に登って周囲を見まわした時、自然と歴史と社会と建物、そして、そこに立つ自分さえもが一体化したように感じられる。はくがこれまで見てきたアジアの都市の多くでは、えてして歴史の連続より断然のみが目についてしまった。アジア都市の現代的特色は、急激に成長する経済的側面が物理的都市の外貌に暴力的な変化を強要する点にある。

人間でも都市でもゆっくりとゆっくりと変化がわからぬように成長することはけっしてマイナスではない。長い少年期や青年期にはくたちが獲得するのは、小さな失敗をへて悟る小さな教訓の数々である。お仕着せの大きな目標の実現を突如強要される場合の欠陥は、それがはたして自分にとって最適なものかどうか思考する時間の猶子に欠けることにある。重要なのは自己修正を可能とする長い時間と精神的余裕であろう。

このいささか時代がかった修身風の教訓は都市や建築にもあてはまるのではないのか、アジアをここ数年歩き続けたばかりの現在の時点での結論のひとつがこれである。インドの良さも欠点も、大地に根づいた緩慢な動きにある。貧困と社会差別と同居しつつ、自らの力で変えていかなければならない。そこにインド建築の辛さ

とたくまじさが醸成される。

「塔の家」の屋上からは数百年前の大学の遺跡とスラムが同時に見える。日向は耐えられぬ暑さだがペランダは快適だ。インド香のかおりに浸りながらはくはアジア建築の未来についてしばし考え、瞑想に耽った。



アジア スタイル

十七人のアジア建築家たち

Chen Ruixian

Li Zuyuan

Seung H-sang

Wen Jun-saung

Wang Yonghe

Ma Guoxing

Asia n

Xing Tonghe

Suo Lang

Rocco Yim

Kay Ngee Tan

Prasert & Theeraphon Niyom

Vijhoang Hac

Yusant & Ravathi Kamath

Gerard da Cunha

Bibhuti Man Singh

Kenneth Yeang

Jimmy Lim

Sty l e

文—村松伸

写真—浅川敏

激動するアジア。
都市や建築はどのように
変わろうとしているのか。
各国で活躍する建築家たちを
歴史的、社会構造的に探究する。

新進気鋭の建築家十七人の作品をカラーで紹介。

現在のアジアの建築